研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著， 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 「学習障害の指導」	分担執筆	1996年3月	『現代学力形成論』、協同出版、227-246頁	学習障害は、聴く、話す、読む、書く、推理する、数学する能力を獲得し、使用することの著しい困難として現れる障害群を示す包括的用語である。指導法には、学業達成を直接の標的としない間接的介入と学業遂行そのものを標的とする直接的介入がある。学習障害には直接教授や認知的行動修正のような直接的介入が効果的であることが証明されている。最後に、小学二年学習障害男児の臨床指導事例が提示された。
2. 「ガイダンス・カウンセリングの機能統合」	分担執筆	2002年1月	『ガイダンス・カウンセリングで学校を変える：小・中学校におけるガイダンス・カウンセリングの展開』教育開発研究所、70-73頁	生徒指導の機能に含まれるものが、ガイダンスとカウンセリングであり、ともに児童生徒の調和的な人間形成、および社会的・職業的自己実現にかかわる重要な教育活動である。人間としての調和のとれた育成を図るためには、ガイダンスとカウンセリングという2つの機能が生きてこなければならない。そのために、両機能が発展してきた経緯やその根本的理念を理解すること、ガイダンスとカウンセリングにかかわる組織体制の充実を図ること、ガイダンスとカウンセリングに関する総合的な指導計画を立案することが必要である。
3. 実践に活かす教育課程論・教育方法論	分担執筆	2002年4月1日 初版 2009年4月20日 改訂版	学事出版	「学習指導の原理」（72-81頁）を分担執筆。進歩主義の教育原理と経験主義の教育原理、動機づけ、教師期待効果などを論じた。
4. 読売新聞東京本社水戸支局・常磐大学連携講座「連続市民講座」地域社会の安心・安全を考える 個人と家族編	分担執筆	2009年3月	常磐大学・常磐短期大学	読売新聞東京本社水戸支局・常磐大学連携講座「連続市民講座」地域社会の安心・安全を考えるにおいて、「発達障害のある人を援助する」という題目で行った講演を整理、再編した論文である。発達障害をめぐる現状、発達障害の特徴、さまざまな援助の方法について論じた。
5. 「特別な支援を必要とする子どもの理解と対応」	分担執筆	2019年3月	高柳真人・前田基成・服部環・吉田武男（編）教育相談（MINERVAはじめて学ぶ教職16）　ミネルヴァ書房　（119-131頁）	教職科目「教育相談」の教科書として編集された書籍で「特別な支援を必要とする子どもの理解と対応」を担当した。特別支援教育の対象となる子どもたちの現状，特徴，対応方法について解説した。

(学術論文(欧文)) 1.				
(学術論文(和文)) 1. 「小集団社会技能訓練の臨床的活用－発達障害児のコミュニケーション技能の査定と指導－」	単	1991年3月	筑波大学教育研究科平成2年度修士論文	自閉症中２男児３名、登校拒否を伴う情緒障害の小６男児１名、学習障害の小４男児１名の合計５名の参加者に集団社会技能訓練を提供し、応用行動分析の枠組みによって分析した。このプログラムから参加者は、相談する、協力する、競争する、自己主張する等のコミュニケーション技能を改善させた。よいゲームの特徴は、構造化されていること、ゲームの戦略が少ない選択肢で構成されていること、選んだ選択肢の結果が直ちにフィードバックされること、短時間で多人数の子どもの反応が得られることであることが示唆された。
2. 「小集団活動による子どもの社会性の育成に関する考察」	単	1992年3月	『教育経営理論研究』（筑波大学教育経営理論研究会）第13巻、10-17頁	収集団活動を通した子どもの社会性の育成に関する実践研究を展望した。行動分析学に基づく社会技能訓練は発達障害児、大学生、精神障害者など多様な対象者に適用され、効果を上げていることを考察した。
3. 「行動分析的アプローチによる発達障害児の社会技能の教授に関する研究の展望」	単	1994年10月	『筑波大学教育学研究集録』第18巻、31-41頁	社会技能の定義が検討され、続いて社会技能の実験的介入研究が、三項随伴性の枠組みにしたがって展望される。現在の社会技能の実験的介入研究は、先行事象として多くの具体的な弁別刺激を吟味し、教師のプロンプティングを減らし、日常環境中にある自然な弁別刺激を活用するようになっている。結果事象として、教師による強化よりも、強化子としての仲間の社会的反応を強化子と採用するようになった。社会技能の般化と維持および研究知見の実践への応用が課題である。
4. 「米国カウンセリング協会誌における研究動向」	単	2001年7月	『進路指導』（日本進路指導協会）第74巻、第8号、11-18	アメリカにおけるガイダンスとカウンセリングの専門学会である米国カウンセリング協会の学会誌『カウンセリング・発達誌』に掲載された研究論文の中から、これまでの内容の変遷と近年の論文の中から特徴ある論文を検討することが目的である。学会誌の傾向は、初期には教育志向だったが、カウンセリングや精神衛生へと内容が推移してきた。近年は、スクールカウンセリングのアウトカム（結果）に焦点を当てた研究やピアカウンセリングないしピアメディエーションの研究が注目されている。

（紀要論文）				
1. 「応用行動分析に基づく自閉症児の個別指導－臨床事例研究を通して－」	共	1997年3月	『上智大学心理学年報』第21巻、35-42頁	6歳自閉女児が大学のクリニックで応用行動分析の技法を用いて基礎的言語技能とコミュニケーション技能を教授された。標的行動は指示に従うこと、動作模倣、受容言語、表現言語、弁別だった。弁別刺激の明瞭な提示、プロンプティングとフェーディング、シェーピング、教材の無作為提示等の技法が用いられた。早期学習尺度は被験児の標的技能の獲得を示した。社会的妥当性が治療開始8ヶ月後に調査された。治療の集中度、セラピスト訓練、獲得技能の家庭への般化が考察される。
2. 「新設科目『Field Activity』の実践報告」	共	1999年12月	『白鴎女子短大論集』第24巻、第2号、307-336頁	白鴎大学女子短期大学部共通科目として開設されたField Activity Iの授業について開設経緯、授業のねらいと活動の構成視点、活動の概要を述べた。近年の学生の特徴として、過度の他者依存、緊張した対人関係、信頼や感動などの情緒的体験の不足がある。そこで自己理解、他者理解、課題解決能力、責任・友情・役割意識等の体験を盛り込んだ野外体験系集団宿泊授業を行った。活動の事前事後の質問紙調査により学生の意識の変化を査定した。すなわち、参加学生は授業の活動を肯定的に評価し、自由記述から満足度も高かったことが示された。
3. 野外体験系宿泊集中授業が参加学生に及ぼす影響についての研究-2003年度Field Activity Ⅰ-	共著	2004年12月	白鷗女子短大論集	２００３年白鷗大学女子短期大学部で実施された授業Field Activity Ⅰについて、活動プログラムと参加学生に対する質問紙調査の結果を報告した。
4. 大学と地域のかかわりをとおして行われる発達障害児（者）支援¬成育医療と心理学の支援に基づく地域ニーズの調査と発達療育家育成プログラムの開発-	共著	2014年3月	人間科学（常磐大学人間科学部紀要）	学内共同研究助成を受けて行った課題研究において担当した，発達障害児支援における学生スタッフ養成について臨床的実験研究を報告した。
（辞書･翻訳書等）				
1. エドウィン・ハー「アメリカ・カナダの最新カウンセリング事情：アメリカのカウンセラー教育プログラム」	共	1995年4月	『月刊進路ジャーナル』（実務教育出版）、20-23頁	エドウィン・ハー氏の執筆したアメリカのスクールカウンセラーの資格要件の論文をを翻訳した。
2. スチュアート・コンガー「アメリカ・カナダの最新カウンセリング事情：カンダにおけるカウンセラーの役割と課題」	共	1995年5月	『月刊進路ジャーナル』（実務教育出版）、20-23頁	スチュワート・コンガー氏の執筆したカナダのスクールカウンセラーの資格要件の論文を翻訳した。

3. 特別支援教育-特別なニーズをもつ子どもたちのために-	共訳	2007年6月	明石書店 98-133頁（全811頁）	全15章中第3章「文化的に多様な社会における特別支援教育」を担当
（報告書･会報等）				
1. 「アメリカにおけるガイダンス関連学会の歴史的変遷」	共	1994年3月	『アメリカの初等、中等教育の教科・教科外実践に関する多面的、総合的解明のための基礎的研究』平成5年度筑波大学学内プロジェクト研究報告書、7-18頁	日本の生徒指導に大きな影響を与えた米国のガイダンス関連学会の拡大過程と名称変更を吟味した。設立当初は学会名に「ガイダンス」の語が含まれたが、1983年に「米国カウンセリング発達協会」と名を変え、さらに92年には「米国カウンセリング協会」となった。これは協会のカウンセリング重視を示唆する。さらにこの協会の機関誌の特集のテーマから研究の方向性を検討し、設立時の教育志向からカウンセリングへと変化してきたことが明らかとなった。
2. 「『ことばの獲得：言語行動の基礎と臨床』」	共	1992年4月	『心理臨床家のための119冊』（創元社）、138-139頁	日本行動分析研究会編「ことばの獲得」の書評である。
3. 「学校での『心の教育』は行われていないのか」	単	1997年8月	『教職課程』（協同出版）第23巻、第14号、38-39頁	学校教育で指導することが期待される「心の教育」について、教育内容の観点から考察した。
4. 「生徒指導・教育相談に関する問題の傾向と対策」	単	1998年10月	『教職課程』（協同研究）第24巻、第15号、46-47頁	教員採用試験において出題された問題で、生徒指導、教育相談の問題の出題傾向とその対策について、出題された問題を分析し、傾向を述べた。
5. 発達心理学特講I	共	2009年3月	2008年度常磐大学FDフォーラム「本学教員による授業改善の取り組み」、18-20頁	本学で担当している科目である「発達心理学特講I」について、授業で工夫している事項を述べた。出席カードによる学生の反応の記述とその分析を提示した。
6. Functional Assessment	共	2012年11月	Better practice for individuals with autism and related challenges: Focusing on behavior support. Korean Association of Independent Living Services for Individuals with Developmental Disabilities (KINDD) 2012 Workshop. Nov. 17, 2012.	大韓民国ソウル市で開催されたワークショップのテキストとして作成した。全90頁中，41～59頁を担当し，機能的アセスメントの考え方，実施の仕方等を解説した。

7. 研究倫理に関する最近の動向ー 医療領域における研究倫理指針の動向から学ぶー開催記.一	単	2017年10月	一般社団法人日本行動分析学会ニューズレターJ-ABAニューズ, No. 88, 7-10.	2017年10月6日(金曜日)から8日(日曜日) に開催された一般社団法人日本行動分学会第 35回年次大会(コラッセふくしま、福島大学) において日本行動分析学会倫理委員会が企画した「研究倫理に関する最近の動向-医療の領域における研究倫理指針の動向から学ぶ-」というシンポジウムの開催記であり, 学会会員向けにシンポジウムの内容を要約して紹介した。
8. 1年間の活動を振り返って：キャンパスエイド・大学担当者による報告　茨城県立水戸南高等学校	共同	2020年3月	令和元年度第11回茨城地域教育臨床研究会「大学生・大学院生による高校でのメンタルサポート活動報告書」46-54頁.（池田七海・大和田涼夏・鈴木一平・中野宏紀・西祐紀　島田茂樹)	水戸南高等学校で行われたキャンパスエイド活動の令和元年度の活動内容を, キャンパスエイドの立場から学生が, そして大学側コーディネーターの立場から島田がそれぞれ報告した。
(国際学会発表)				
1. Group Instruction of Turn-Choice Skills to Children With Autism and Developmental Disabilities	単	2010年5月	Association for Behavior Analysis International the 36th annual convention in San Antonio, TX	小集団社会技能訓練において, 参加者のゲーム参加時の順番を決める行動に対して介入を行った。その結果、参加者は, 様尼な順番でゲームを行い、それに付随してゲームによく参加するようになった。
2. Effect of Video Modeling on Attention Behavior of Junior High Students with Developmental Disorders	単	2011年5月	Association for Behavior Analysis International the 37th annual convention in Denver, CO.	小集団社会技能訓練において、指導中の適切な行動を促進するために, 過去の指導中の行動をビデオで提示し, 参加者の行動の自己制御を目指した. その結果、参加者は指導中に適切な行動を遂行できるようになった。
3. Teaching discrete trial training skills to under-graduate students: An exploratory study	単	2012年5月	Association for Behavior Analysis International the 38th annual convention in Seattle, WA	発達障害児支援の臨床活動に参加する学生スタッフを養成するためのプログラムを開発し、その効果を分析した。この実験では参加者を増やしてプログラムの効果を分析した。
4. Acquisition and generalization of questioning skills of children with autism in small group settings	単	2013年5月	Association for Behavior Analysis International the 39th annual convention in Minneapolis, MN	小集団社会技能訓練において, 参加者の質問するスキルの獲得と般化を目指したプログラムを実施し、その効果を分析した。指導の結果、参加者は質問スキルを実行できるようなった。

（国内学会発表） 1. 「小集団社会技能訓練による発達障害児の対人技能の改善」	共	1991年7月	『日本行動分析学会第9回大会発表論文集』（立命館大学）、34-35頁（島田茂樹・中野良顯）	質問応答する等の対人コミュニケーション技能は重要な社会技能である。自閉症は社会性・言語性の遅れを中心とした発達障害であり望ましい対人技能を教授される必要がある。本研究は社会性を教授する包括的プログラムパッケージである小集団社会技能訓練の中にコミュニケーション技能と推論技能を学習させるための「インタビュー」と「クイズ」の課題を組込み、その効果を検討することを目的とした。インタビューは２人ひと組で行い、相手に面接して必要な情報を聞き出しその情報を第３者に発表する、他の者はその情報を記憶するという課題であり、クイズは与えられた情報から複数の答を選びさらにその答を１つに特定するという課題である。３名の発達障害児に各課題を適用した結果、各被験児に他者に質問する、聞き出したことをメモする、メモに基づいて発表する、情報を正しく記憶する、クイズで推論する、自力で問題を解く等の技能を獲得させることができた。
2. 「言行一致訓練による発達障害児の妨害行動の改善」	共	1992年10月	『日本行動分析学会第10回大会発表論文集』（駒澤大学）、33-34頁（島田茂樹・中野良顯）	発達障害児の小集団訓練場面における妨害行動の改善に及ぼす言行一致訓練、とくに一致の強化の単用と一致の強化と不一致の罰の併用との効果を比較分析することを目的とした。発達障害児３名（中２、男子２名、女子１名）に、言語による事前約束、不一致に対するフィードバック、一致・不一致に対する自己評価と教師による結果の施与の３成分から成る言行一致訓練プログラムを適用した。訓練手続きは、1)教師が被験児の標的行動を教示する、2)言行一致を強化（社会的強化）する、3)一致の強化にチョコレートメダルを施与する、4)一致を強化し不一致に罰（反応コスト）を適用する、だった。一致の強化の単用では問題行動の自制が十分ではなかったが、不一致に罰技法を併用した結果、すべての被験児に問題行動の自制が見られた。言行一致訓練の発達障害児への適用では、一致の強化と不一致の罰の併用が有効であることが示唆された。
3. 「学習障害児のクリニックでの学業行動の改善」	共	1993年10月	『日本行動分析学会第11回大会発表論文集』（兵庫教育大学）、37-38頁（島田茂樹・中野良顯他）	学習障害と疑われる小学２年男児の臨床指導事例から、学習障害児の特徴、教育的ニーズ、および指導法を検討した。被験者は、公立小学校２年男児、普通学級在籍、ＩＱ７２だった。国語技能では、読み障害が著しく（平仮名の読み間違え、拾い読み、文末の歪曲）、読解では重要情報を文章内に探索しなかった。算数技能では、数字の読み違え、＋-符号の混同という特徴があった。被験者への指導は、直接教授指導案に基づいて、週１回２時間（全28セッション）行った。母親には子育ての悩みに答え、家庭での適切な学習指導の方法を教えるためのカウンセリングを実施した。国語・算数の指導とも、直接教授の技法と、プロンプティングとフェーディングとを組織的に組合せて指導した。その結果、被験者の学業行動は著しく改善された。学習障害に対する指導では、家庭・学校・専門機関が協力連携し、子どもへの指導だけでなく親の精神面への支援も積極的に行うことが非常に重要であることが示唆された。

4. 「ビデオ・フィードバックによる発達障害児の注目行動の改善」	共	1994年10月	『日本行動分析学会第12回大会発表論文集』（上越教育大学）、22-23頁（島田茂樹・中野良顯）	中学高校段階の発達障害児の教育目標の一つは、自分の行動をモニターし自己制御する能力を獲得しそれを使用することである。本研究は小集団活動でビデオ映像を用いた訓練が発達障害中学生の行動に及ぼす効果を実験的に分析することを目的とした。被験者は発達障害の中学２年２名で、いずれも小集団活動中の注目が低く、またM子は集団過程のモニタリングの低さが見られた。グループリーダーは、被験者が自発した適切な反応と不適切な反応の映っている映像を複数例選択する。セッションでは、ＶＴＲの提示、画面の人物の特定、ビデオ内の行動の自己（他者）評価、集団全員による社会的強化、正しい行動のリハーサル、その行動の過剰学習を実施した。その結果２人の被験者に適切な注目行動を獲得させ、維持させることができた。	
5. 「中・高校生における生徒指導計画の現状に関する調査」	共	1995年11月	『日本進路指導学会第17回研究大会発表要旨収録』（関西大学）、46-47頁（島田茂樹・中野良顯・花屋哲郎）	Gysbersらのミズーリ州総合的ガイダンス・プログラム・モデルの評価枠組みをもとに、わが国の生徒指導・進路指導計画の現状を明らかにすることを目的とした。平成5年度進路指導中央講座の参加者110名に、定義と哲学、施設、諮問委員会、資源（教材や各種テスト）、職員配置パターン、予算を尋ねる質問紙調査を実施した。現状は次の通り。生徒指導の定義と哲学がないか、十分いきわたっていない。相談内容の機密保持のために必要な施設が整備されていない。中・高校においてカリキュラムに基づく生徒指導はほとんど行われていない。生徒が達成すべき資質や能力が特定されておらず、生徒や親のニーズ調査も行われていない。生徒指導は即応的サービスが中心である。しかしそれでさえ十分な時間が配分されていない。生徒指導の独立の予算が組まれていない。教職員へのコンサルテーション活動はほとんど行われていない。生徒指導の諸活動を、親、教師、地域の人々に浸透させる活動が十分行われていない。学校カウンセラーが学校で果たすべき役割、および生徒指導組織の編成の指針の整備、確立が急務である。	
6. 「ミズーリ州総合的ガイダンス・プログラム・モデルの基礎と成分の検討」	共	1995年11月	『日本進路指導学会第17回研究大会発表要旨収録』（関西大学）、44-45頁（花屋哲郎・中野良顯・島田茂樹）		
7. 「精神遅滞児にセルフマネジメントを教える」	共	1996年6月	『日本行動分析学会第14回大会発表論文集』（愛知県心身障害者コロニー）、20-21頁（島田茂樹・今井義人・中野良顯）		

8.	「米国総合的ガイダンス・プログラムの内容の検討」	共	1996年10月	『日本進路指導学会第18回研究大会発表論文集』（筑波大学）、66-67頁（島田茂樹・中野良顯）	95年よりスクールカウンセラー活用調査研究が始まった。教職員以外の専門家が学校に来たことで新たな課題が生じている。そこでスクールカウンセリング先進国であるアメリカの学校ガイダンス・カウンセリング・カリキュラムのマニュアルの内容を検討し、生徒指導・進路指導実践の指針を得ることを目的とした。全米50州の州教育委員会に、各教科とガイダンスに関係する州のガイドラインの郵送を依頼し、7州からカリキュラムを入手した。各州のプログラムに共通した特徴が見られる。それは、アメリカ学校カウンセラー協会推奨の総合的･発達的学校ガイダンスモデルの6つの特徴、総合的、発達的、タイムマネジメントシステム、管理職への指針、能力開発、介入評価である。これまでの実践の蓄積から確立したアメリカのシステムにならい、日本における生徒指導･進路指導の新しいモデルを構築してゆくことが必要だろう。
9.	「生涯キャリア発達から見た幼児期におけるキャリア能力ー幼稚園教諭養成課程で求められる学習内容の検討ー」	単	1999年11月	『日本進路指導学会第21回研究大会発表論文集』（上智大学）、68-69頁	生涯キャリア発達という視点から幼児教育において子どもにどんな能力を開発すべきかを吟味することは意義のあることであろう。ミズーリ州総合的ガイダンスプログラムの幼稚園段階のガイダンスカリキュラムの内容を検討することを通して、幼稚園教諭養成課程の学生が学習すべきキャリア能力と発達の視点を吟味した。ミズーリプログラムは、ガイダンスカリキュラムを通して生徒に開発する能力を「キャリア計画と探索」「自己と他者の知識」「教育的・職業的発達」の3つの領域で示している。ガイダンスプログラムマニュアルでは「自己の知識と対人的技能」「人生の役割、場面、出来事」「ライフキャリア計画」という3領域と、領域ごとに5つの目標が特定され、各年齢段階ごと開発すべき能力が示されている。学校教育の全段階を見通したガイダンスカリキュラムで示された諸能力は示唆に富むものである。
10.	「野外体験系宿泊集中授業『Field Activity I』の実践報告(1)～設立経緯と活動内容～」	共	2000年10月	『全国保育士養成協議会第39回研究大会発表論文集』（北九州八幡ロイヤルホテル）、94-95頁（嶋崎博嗣・島田茂樹・斎藤一人・伊崎純子）	野外体験系集中宿泊授業Field Activityの開設経緯を述べ、1999年度に実施したField Activity Iを素材として活動内容と展開方法を開示した。気になる学生の姿として、誰かがやってくれるという意識と友達関係の緊張したつながりがあった。心と身体を使い仲間との信頼、連帯、感動を体験する機会を提供するために、自己理解、他者理解、課題解決能力、責任・友情・役割意識等の体験を盛り込んだ野外体験系集団宿泊授業を行った。活動には、救急法の講義と実技、着衣泳の講義と実技、砂の造形、塩作り、野外調理、キャンプファイアが含まれる。

11. 「野外体験系宿泊集中授業『Field Activity I』の実践報告(2)～参加学生の意識の変化に関する調査～」	共	2000年10月	『全国保育士養成協議会第39回研究大会発表論文集』（北九州八幡ロイヤルホテル）、96-97頁（島田茂樹・嶋崎博嗣・斎藤一人・伊崎純子）	1999年度に行われたField Activity Iに参加した49名の学生に対して、授業の事前事後に質問紙調査を実施し参加学生の意識の変化を探索的に検討した。事前調査では参加動機、期待、懸念を、事後調査では満足度、達成度、および自由記述を行った。参加動機は友達を作ることと内容への関心が高く、期待は5点満点でほとんどの項目が4点以上だった。満足度も総じて高く、特に「自分のことを考える」の上昇が顕著だった。班を中心とした集団活動を通して、自己と他者との役割分担や考え方の相違や個性を考えるようになったと思われる。
12. 「野外体験系宿泊集中授業『Field Activity I』の実践報告(1)～2000年の実践と振り返り～」	共	2001年9月	『全国保育士養成協議会第40回研究大会発表論文集』（ロイトン札幌）、68-69頁（斎藤一人・嶋崎博嗣・島田茂樹・伊崎純子）	2000年度実施のField Activity Iの活動内容と参加学生の意識の変化を検討した。授業は山形県にある鳥海高原家族旅行村で行われ54名の学生が参加した。従来の活動の他、花笠音頭、民話の話を聞く、鳥海山登山という地域の特色を加えた。質問紙調査では、期待と満足度に加え、自己価値観や他者価値観の尺度を用いた。満足度はプラスに変化し、行動特性は自己実現思考、自己価値観、他者価値観が肯定的に変化した。自由記述からも3泊4日の集団生活は学生の意識や行動に変化をもたらしたことが示唆された。
13. 「行動倫理学に向けて」	共	2002年8月	『日本行動分析学会第20回大会シンポジウム（会員自主企画）』（日本大学生物資源化学部）（中野良顯・森山哲美・坂上貴之・島田茂樹・西村美佳）	日本行動分析学会倫理委員会委員が企画した自主企画シンポジウム「行動倫理学に向けて」における報告である。倫理的行動のキーワードとして、科学的裏付けを持つ実践、説明責任、対抗制御、説明付同意書（informed consent）が挙げられる。説明的同意書には、参加者の自発的参加、研究の目的、選択の基礎、研究手続き、リスクと不快なことの記述、利益の記述、利用可能な選択肢、秘密保持の保証、費用の考慮、質問への回答の提供、強制的でない拒否、不確実な情報開示、追加要素を考慮すべきである。説明付同意書は研究参加者の対抗制御を可能にし、研究者の倫理的行動を促進する。
14. 「野外体験系宿泊集中授業『Field Activity I』に実践報告(3)」	共	2002年9月	『全国保育士養成協議会第41回研究大会発表論文集』（ホテル青森）、70-71頁（島田茂樹・齋藤一人・嶋崎博嗣・伊崎純子）	2001年度に行われたField Activity Iの活動内容と参加学生の意識の変化を検討した。活動は、従来行ってきた着衣水泳、救急法実習、海浜活動、キャンプファイア、野外調理に加え、一人用テントで過ごすナイトソロ活動と身体表現活動の専門家によるふれあい活動を新たに実施した。質問紙調査と自由記述の結果から、活動全体を通して自己価値観が高まり、他者への信頼感が肯定的に変化したことが示され、ナイトソロ活動は集団の中での自他の位置や役割を深く考える機会を提供したことが明らかになった。

15. 「障害児の行動特徴と指導法」		2002年7月	第49回栃木県幼稚園教育研究大会第9分科会（社団法人栃木県幼稚園連合会）	
16. 野外体験系集中宿泊授業『Field Activity I』の実践報告(第4報)	共同発表	2004年10月	全国保育士養成協議会第43回研究大会発表論文集（名古屋都市センター、全日空ホテルズホテルグランコー トナゴヤ）118-119頁（島田茂樹・齋藤一人・岩城淳子）	2003年度に行われたField Activity Iの活動内容と参加学生の意識の変化を検討した。
17. 小集団活動を通して発達障害児にソーシャルスキルを教える-ニーズアセスメント調査による効果の分析-	共同発表	2008年8月	日本行動分析学会第26回年次大会（島田茂樹・岩谷美奈）	小集団ソーシャルスキル訓練を通して参加者のソーシャルスキルの獲得と使用を促進するプログラムを実施し、その効果を2回にわたる保護者へのニーズアセスメント調査の結果から分析した。「分からないと言う」「質問に答える」「話を聞く」「注目して聞く」という4つのソーシャルスキルの達成率が低いことがわかった。
18. 発達障害児に対するソーシャルスキルの指導～土曜教室での活動を通して～	共同発表	2008年8月	日本行動分析学会第26回年次大会 31頁（岩谷美奈・島田茂樹）	発達障害のある子どもに対するソーシャルスキル・トレーニングを行う環境として土曜教室という指導の場を設けた。「返事をする」「質問する」「質問に答える」「注目する」「所定の場所に座っている」という5つの標的行動を選択し、指導を行った。標的行動を遂行すると参加者自身が好きな色を選んで自分でカードに貼れることや、シールを貼った後に指導者あるいは学生ボランティアから誉められることが影響し、行動の生起率が高くなったと考えられる。
19. 集団ゲームにおける異なる順番の選択行動の形成	共同発表	2009年7月	日本行動分析学会第27回年次大会　75頁（島田茂樹・鈴木雅子）	小集団ソーシャルスキル訓練において、ゲームの順番にこだわりの強い子どもがいて、特定の順番になることを主張し、順番決めに時間がかかったり、希望の順番になれずにかんしゃくを起こしたりすることが見られた。本研究では、ゲームの順番決定行動にシールによる分化強化を行って、異なる順番の選択行動を形成した。
20. 発達療育家養成プログラムの開発	単著	2010年10月	日本行動分析学会第28回年次大会発表論文集25頁（神戸親和女子大学）自主企画シンポジウム「療育実践と療育家育成の課題」	療育実践と療育家育成の課題について、大学の立場から問題提起した。常磐大学で行った公開講座やアンケートの結果から、発達の遅れの早期発見と早期療育とその拠点づくり、発達療育家の育成、発達障害に関わる人々への支援に関する基礎研究と応用研究の連携、とくに、医療と心理学の学際的かつ連携的な取り組みの必要性が提起されたことを報告した。

21. 発達障害児支援における学生スタッフ養成：スタッフ養成プログラム開発の予備的研究	単著	2011年9月	日本行動分析学会第29回年次大会発表論文集（早稲田大学），52頁	発達障害児支援の臨床活動に参加する学生スタッフを養成するためのプログラムを開発し、その効果を分析した。この実験的取り組みでは今後の発展の予備的研究として一人の参加者の行動を分析した。
22. 疑問詞質問が自閉症の子どもの応答行動に及ぼす効果	単著	2012年9月	日本行動分析学会第30回年次大会発表論文集（高知城ホール），82頁	小学校2年生の自閉症のある男子児童に対する読解課題の指導の臨床的研究を報告した。疑問詞質問を行いながら絵本を読ませることによって，子どもに絵本の読みを教えることができた。
23. 大学構内における指定喫煙所外喫煙行動に及ぼすグラフ掲示と視覚的サインの効果	共同発表	2013年7月	日本行動分析学会第31回年次大会発表論文集（岐阜大学），43頁（島田茂樹・高橋未聡）	大学内の喫煙所において、指定喫煙所外で喫煙する者の数を減少させるために、グラフ掲示と視覚的サインからなる介入を行う大規模実験の効果を分析した。介入の結果、一定の数の減少が見られたが、完全になくなるまでにはいたらなかった。
24. バスケットボールのフリースローシュートに及ぼす行動的コーチングの効果−自己評価と他者評価によるシュート決定率の変化−	共同発表	2014年6月	日本行動分析学会第32回発表論文集（弘前大学），50頁（島田茂樹・平野華奈子）	公立高等学校女子バスケットボール部の部員に対して、フリースローシュートのスキル向上のための行動的コーチングプログラムを実施した。その結果、生徒の中にはスキルを向上させた者がいた。
25. 「研究倫理に関する最近の動向：医療領域における研究倫理指針の動向から学ぶ」	共同発表	2017年10月	一般社団法人日本行動分析学会第35回年次大会発表論文集（福島大学・コラッセ福島），36頁（島田茂樹・鎌倉弥生・井澤信三・眞邉一近・竹内康二）	日本行動分析学会倫理委員会委員が企画した（公募企画シンポジウム6）における報告である。研究の倫理をめぐる問題に関しては，研究費の不正使用に関わる問題，研究データのねつ造や論文盗用に関する問題，公正な研究の遂行，研究対象者の権利やクライエントの人権に配慮した研究に関わる問題，研究者の研究を遂行する権利に関わる問題等が挙げられる。このシンポジウムでは，医療領域の最新動向と研究倫理を学び資源について情報提供を行った。
26. 空手道における行動的コーチングが初心者の技の正確性に与える効果	共同発表	2017年10月	一般社団法人日本行動分析学会第35回年次大会発表論文集（福島大学・コラッセ福島），58頁（島田茂樹・岩渕良伽）	ビデオモデリング，フィードバック，順行連鎖法からなる行動的コーチングが，空手初心者の技の正確性に及ぼす効果を検討した。参加者は，ほぼ全ての行動要素でベースラインと比較して，介入後のテスト試行の平均得点が上昇した。

27. 不登校児へのオンライン学習支援を行うスタッフ育成プログラム	共同	2021年8月	日本行動分析学会第39回年次大会発表論文集，35頁．（植竹智央・島田茂樹・池澤真帆・志賀優花梨・平山瑞季）	不登校児童生徒へのオンラインでの学習支援とコミュニケーション支援を行うスタッフのうち，新規に参加したスタッフに対して，不登校児童生徒へのオンライン支援を行う上で必要なスキルや心構えを効果的に育成するための育成プログラムを開発し，その効果を分析することを目的とした。課題分析に基づき育成プログラムを開発し，2021年度に新規参加した5名の学生にプログラムを実施した。新規スタッフに必要な知識と態度を獲得させることができた。スタッフも活動への不安が解消された。
28. 大学生の過剰適応傾向と，学校場面，アルバイト場面，友人場面におけるストレコーピングの関連	共同	2021年12月	日本精神衛生学会大37回大会抄録集，35頁．（大森雅史・足立拓哉・島田茂樹・水口進）	本研究は，適応の特徴（二重適応群・過剰適応群・非社会的自己満足群・二重不適応群）ごとに学校場面・アルバイト場友人で使用されるスレコーピングを比較すること目的した。大学生114名を対象に，個人属性と青年期過剰適応尺度（石津，2006）とTAC-24（神村ら，1995）から構成された質問紙調査を実施した。過剰適応をする学生のストレスコーピングの特徴として，①友人場面のストレ状況を想起したとき“肯定的解釈 ”が有 意に高かった，②学校場面・友人場面での場面・友人でのストレス状況を想起したとき“気晴らし”が有意に高かった，③友人場面でのストレス状況を想起したときコーピング行動として“カタルシス”が有意に高かった。
29. 不登校の子どもへのオンライン支援プログラムの開発：子どもの変化と社会的妥当性	共同	2022年9月	日本行動分析学会第40回年次大会発表論文集，37頁．（島田茂樹・植竹智央・池澤真帆・志賀優花梨・北村聡子）	オンラインによる学習支援とコミュニケーション支援を受けた子どもの変化を保護者への質問紙調査から分析し，合わせてプログラムの社会的妥当性を検討することを目的とした。オンライン支援プログラムに参加する子どもの保護者16名にGoogle Formで作成した質問紙をオンラインで配布し回答してもらった。子どもの変化では笑顔が増えた，自信が持てるようになった，家族外の関わりが増えた等の回答があった。現在の子どもの状況については，学校に行く頻度が増えた子どももいた。子どもの行動の変化では，保護者が肯定的に受け止めていた。オンラインによる定期的活動が子どもの対人関係と情緒面に肯定的影響を与えることができた。
（演奏会･展覧会等） 1.				
（招待講演･基調講演） 1.				

(受賞(学術賞等)) 1.						
研　究　活　動　項　目						
助成を受けた研究等の名称	代表,分担等の別	種　類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概　　要
(科学研究費採択) 1.						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. 「小集団社会技能訓練の臨床的活用に関する研究ーコミュニケーション技能を促進する課題の探究ー」 2. 「自閉性障害児想起集中行動治療の国際レプリケーション研究」			1990年 1993年		安田生命社会事業団 安田生命社会事業団	『安田生命社会事業団研究助成論文集』第25巻、第2号、93-102頁 『安田生命社会事業団研究助成論文集』第28巻、第1号、84-93頁
(共同研究･受託研究受入れ) 1.						
(奨学･指定寄付金受入れ) 1.						
(学内課題研究(共同研究)) 1. 視線によるウェブ・ユーザビリティ評価の検討	分担	―	2006年度	―		
2. 大学と地域とのかかわりをとおして行われる発達障害児(者)支援 ―成育医療と心理学の視点に基づく地域ニーズの調査と発達療育家育成プログラムの開発― (学内課題研究(各個研究)) 1.	分担 ―	― ―	2010-2013年度	―		
(知的財産(特許・実用新案等)) 1.	―			―	―	